

特 259

316

龍三卷葛 哲言
田瑞絹城 乾寺

十二

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

始



特 254
316



誓願寺

梗概 (所) 京都誓願寺

(季) 三月

一遍上人熊野権現より感得せる六十萬人頌の勸進札を携へ、諸國遍歴のため先づ都に上り、誓願寺に到りて札を授けけり。こゝに一人の女性あらはれ、其札



を見て六十萬人決定往生とあれば、六十万人より外は往生に洩るゝやと不審あり。上人答へて六十萬人とは感得の四句の頭字を取りたるにて、洩るゝ事なき御法を



れば人数に限りはあらじと言へば、女性大に喜び、誓願寺と打ちたる額を除け、上人の筆に六字の名跡を書きて賜はれと言ふに、上人如何なる人やと尋めれば、女性

は和泉式部よと明かしく、姿を消しぬ。上人乃ち女性の請ひを容るれば、式部の靈現はれ、佛果を得歌舞の菩薩となりたるを喜び、舞をまひ利益をたゝえて

けりとぞ

誓願寺 (三番目)

役別	装束
シテ聖女	面増(又は玉来衣) 髪 髪受帯 着付、箔 唐織着流 数珠
後シテ 和泉式部 の 蘆	面前同 髪 髪帯 黒垂 天冠 白蓮ノ付 着付、箔 色大口 長絹(舞衣ニ) 扇
ワキ一途上人	角帽子 着付、小格子 白大口 水衣 腰帯 数珠 扇
ワキツレ 從僧ニ人	ワキ同装

誓願寺

^{己丸}
^{振上三人}
^注 教への道も一^ノ声の^ノ一^ノ法を
 四方に弘めん^{コト} 是^ハ仏の
 行者一^ノ遍と^ス 聖^ノふて^ハ我^ハ三^ノ徳野
 説^キ誠^ノ殿^ノも^シ糸^ノ籠^ノカ^シて^ハゆ^ハ神^ノ鏡^ノ
 四^ノ方^ノの^ノ文^ノを^シ結^シり^テは^ハ程^ノよ^ク 國^ノ出^ルふ

...

...

弘めん為唯今故キヤ上ニ弘飛
 頼む頼むもトこの心ハとキ
 立チちカるル縁ヰ衣ヰ紀ノ関守がコもカ来ラらチ
 出デ今日ノ救ム重ナなりテ時モもコ何レ
 春ノの以花レ於キよス志スルキ里ノ
 急ニ行キ。於テ誓ヒ於テ寺ニ志スルキ。

是ニにテ御レを弘めウばルにテハ
 有リ難ヤ實ニ佛ノ法ノ力トシテ貴ク儀ニ
 難シ集メの色に袖を法ら祿重ヲ
 法シて知も志らぬもねらず也ト
 念フ佛ノ之ノ味ノ道場もあらず入ル人ノ
 有リ難シさよ所ニ名ヲ以テ洛陽の。

苑の衣コれ今コ更コよコびコの空コよコ書コ深コの
 夕コべコの鐘コの聲コらコしコ称コ名コの清コ法コの
 高コ鐘コのシヨウ名コきコまコいコ 独コ風コのコ人コきコ
 新コの松コ尾コ おコのコきコくコとコ
コかコをコれコがコ 日コ上コ 弥コ陀コ新コむコんコ誰コも
 一コ声コのコくコ 内コよコまコるコ蓮コ葉コのコ

濁コりにコよコぬコんコもコてコ何コ歎コぐコひコの
 有コきコ有コ鞋コやコけコあコいコ淺コらコあコぬ
 控コひコのコあコのコ何コらコりコ更コ恨コおコやコ上コ人コの
 清コれコをコいコあコたコもコんコくコ
 有コ鞋コやコけコれコをコんコれコのコ南コをコ阿コ弥コ
 陀コ仏コ六コ十コ万コ人コ受コ定コ性コ生コとコ書コれコりコ。

UTL 1717

1717

六十万人より亦か^カに^シ生^シず^ル淺^キき^{コト}は
 在^ルら^ズ ^{コト}面白^クも^ト不^レ當^ニ物^ナら^ズ。
 是^レハ^ニ態^ニ世^ニ佛^ノ城^ノ殿^ノより^シ四^ノ句^ノの^モ文^ヲを
 揚^リり^てい^ハ程^ハふ^シ生^シ四^ノ句^ノの^モ文^ノの上^ニは
 字^ヲを^シえ^りて^ハ僅^ニ文^ヲは^シ為^スふ^レ書^キ付^ケり[。]
 た^ニ南^無阿^彌陀^佛次^ニ定^ル性^ヲ生^シす^{コト}。

け^レ文^ノ斗^リの^モ頼^ミり[。] ^{コト}扱^キ四^ノ句^ノの
 文^ハい^ハら^なる^事は^シく^テ有^ルや^らん。
 愚^カ癡^ノの^モ我^レら^ニに^シお^しめ^入 ^{コト}い^はす[。]
 諸^ノ川^ノと^モ波^ノを^シや^りさん ^{コト}六^ノ字^ノ名^ノ号^ヲ
 一^ノ遍^ノ法^ヲ。 ^{コト}十^ノ界^ノ依^テ正^シ一^ノ遍^ノ體^ヲ。 ^{コト}万^ノ妙^ノ
 難^クと^モ一^ノ遍^ノ體^ヲ。 ^{コト}人^ノ中^ノ上^ニ ^{コト}妙^ノ好^ノ華^ヲ。

け四句の文は上の字なれを^上二十
 万人と書きたるあり^上有難や
 今も我を不愛するもの救は^上衛をも
 照も^上弥陀の教^上光明遍照
 十方世界に漏るる方なき清法
 なるを^上僅ふ^上二十万人と人救を

いで愛むじき^上 扱は^上姑^上やん坊
 たり^上い^上た^上れ^上の^上六^上十^上万^上人^上其^上人^上救^上を^上
 お捨^上く^上 ^上改^上定^上性^上生^上南^上無^上阿^上弥^上
 陀^上佛^上と^上 ^上唯^上一^上心^上不^上亂^上す^上な^上ら^上ば
 夫^上を^上即^上ち^上出^上世^上之^上人^上と^上す^上 ^上性^上生^上
 なれ^上や^上何^上事^上も^上 ^上み^上か^上お^上捨^上く^上南^上無

小 滋

阿彌陀佛と。唱ふまは佛も

我もなうりまうりかむむのさだ

仏の声まうり至誠心深ん也向

愛影の鐘は声身まそみて有難や

滅ホツ妙ホツあり教へ十声ひと声救

ころご悟りまよまわひまよま

給ふぞ有難きセキヤク左程ふ夕陽

雲よぬらひく西より雲は夕月の

夜もなき佛をさぶらん夜も佛を

さや急がんカロンギまや文のくや

夜も雲の独風の眠り覚えさんと

心ありまうりまはれまカネ有難や

カネ

お障のあまはらる身を助け給はる
けせよつ二世の安樂のまよや生れ
ゆんぞ嬉しき ぎふ安樂の因
なきや安くせらる蓮葉の甘露の
縁ぞ徳なる 有るや
はらふ始めて 弥陀の玉縁たる道ぞ

頼もした たのみぞ徳けあへ
或利益を量罪 又余縁の
後のせも 弥陀一教と 妙物を
有難やく 八万諸聖の教は是
阿彌陀佛なるべし 此の心も
上人も唯同じに 誓願寺ぞと

U145A

佛と上人を一拜は拜と申なり

いふ上人はかたぎ事の外コト何事

にてゆぞいぢせ釈寺と申なる

額をのけ六字の名をりよらなり

此コト思ひもあらぬ事を

承りゆ物か昔より誓釈寺と

おとる額をのけ六字の名をりよ

なごいまいり其上に法師がま

うご思ひもあらぬ事にさゆ

いやく是もぢおごの思者にてゆ

物をコトそもぢおごの思者よ

い身は何知し任人ぞコト妻が拙も

イハシ

ワラハスミカ

よそならん。何の名塔を栖カひく
 結ツく。あコたやあカあの石塔ハ
 和泉式部の標シとこそ。ゆキはるふコも
 栖カと。不フ愛アイなり。あコのナ不フ愛
 一ヒひそ。我ガも昔コのヒ寺テ不フ遇ウの
 あれ。沙サ水スイの春ハも。秋アキや通ツふク。

^{日下}むシまマふフ泉センのミ川カハらラ名ナをナ流ルさん
 もモ死シやヤよヨそソれレもモよヨふフ
 我ガ偽イりリあるル此コのヒ和ワ泉セン式シキ部ブのミ見ミれ
 ぞゾとトてテ石イシ塔トウのミ石イシ火ヒのミ光ミツとトたタふ
 英ヒよヨもモあアるル。あコのナ不フ愛アイ
 昔コのヒ寺テ不フ遇ウのミ誓チカひヒをナとト

おたたる顔とのけ。二字の名号ふ
引^上之佛前も極一まれど

無三
上

不思議や異香業ど法

花壇の下も喜ま出れ声まら車^下の

何らたさよ。是も付ても称名^{太コサレ}の

心^{カネ}を頼ま法。心^{カネ}お唱^ラ一^{ドウ}同^{オン}まふ

已^下合^下

南無^エの^ニ弥^ニ陀^ニ佛^ニ弥^ニ陀^ニ如^ニ来^ニ 出^上端^上 あり

有^ハ特^ハの^ノ額^ノは^ハ名^ハ号^ハや^ハ如^ハ来^ハの^ハ凡^ハ生^ハ

海^ハ度^ハの^ハ為^ハ佛^ハの^ハ清^ハ名^ハを^ハ歌^ハま^ハす^ハ

佛^ハ前^ハより^ハつ^ハま^ハ有^ハ特^ハま^ハす^ハも^ハれ^ハも

仮^ハなる^ハ夏^ハの^ハ世^ハよ^ハ。和^ハ泉^ハ武^ハ部^ハとい^ハま^ハれ

一^ハ身^ハの^ハ佛^ハ果^ハを^ハ得^ハる^ハや^ハ極^ハ樂^ハの^ハ

勢尊の菩薩となりてあるなり。二十
六の ハ上 不^レさいの聖なるの清法なる。
深^クなる ハ上 抄^レの文日^ハ 常^ニの灯火。
幽^クなる ハ上 さあ^レらる^ル友^ニぞ極樂
世界^ニふ^レ生^レれ^ルら^ルと有^ル難^クなる ハ上 大^ニコオク
そ^レも ハ上 當^ニ寺^ニ抄^レの寺^ニと^カなる ハ上

天智天皇は抄^レの本^ニぞ ハ上 慈^ニ也^ニ万^ノ部
の大^ニなる ハ上 護^レ春日^ノの神^ノの作^ト名^ナ
神^トとい^ヒ佛^トとい^ヒ時^ニ是^レ水^ノ波^ノの隔^テ
なり ハ上 然^レも ハ上 和^ニ光^ノの教^ノ廣^ク
一^ノ種^ノ分^カ身^ノの ハ上 本^ニぞ ハ上 生^レ漸^ニ度^ノ
び^レ本^ニぞ ハ上 たり ハ上 上^ニ ハ上 され^ルた^ル毎日^ハ一度^ハ

日 西方淨土小蓮のひびく末蓮の持
の誓ひを破るゝおぼしきもの
カニ

クセ トリ
仕舞 セイ
來蓮持子 留アリ
聖流末蓮を落日の前と云
昔在蓮山の青名は法華一佛いよ
西方の弥陀如来。慈眼視念生

あらまきて 娑婆示現親世を
三世利益同一神有種や我ら
為の慈悲あり 若我成佛の
光りを受る世の人れ
ゆがたき法也 舟のみあき掉
さすでも渡る彼岸ふみりく

無量壽

法

樂ト々セ々トを極トむる玉トのト名トなれや
小○十ト悪ト万ト邪トのト事トひトのトまトまトのト空トをトれ
 去ト如トのト月トはト西ト方トもトこトをト去トるト事
 去トらトらトんトのト浄トとトはトあトの
 誓ト願ト寺トをトおトむトあトりトてト尋ト常トの
 菩ト薩トのト極トとトふト 佛ト事トをトなトせトる。

心トがト存ト在ト 独トりトにト佛トのト清ト名トをト。
 尋ト常トとトんト 各トをト由トるト法トのト場ト人ト
お返し法トのト場ト人トのト声トもト妙トありト
 称ト名トのト救トとト 虚ト空トはト空トとトくトハト中ト流ト
 音ト樂トのト声ト 日ト 異ト香ト薰トとトてト
 花トふトがト香トとトれト 日ト上ト 神トとトはトまトやト

かきももさきよ上人の利益
 うかよと善菩薩を流めんに
 清浄よおてる六字の額をこか
 一周ふれし給ふあらさなりき
 亭子端う那

葛

城

櫻楓 (所) 大和國葛城

(季) 十二月

羽黒山の山伏、葛城明神へと志し、大和の國葛城山に着きしが、折柄の大雪にて前後も分かずなりたれば、とある木蔭にて休らひけり。所の女ともおほしきが柴を負ひて来り、此様を見ていたはり、谷蔭の我が庵へと導き、夜寒なれば標など焼きてもてなしぬ。されば山伏は標の謂など尋ねたる後、後夜の勤めを始めんとするに、妻が為にも祈加持して給はれ、真は我が葛城の明神なるか、岩橋をかけざりし科にて明王の索に縛められ、今も三熱の苦みに堪えずとて姿を消しぬ。山伏乃ち祈願をこむれば、明神の神体あらはれ、三熱の苦みを免れたるを喜び舞をまひてありしが、夜の明けぬに先立ち再び消え失せけりとぞ。

葛城 (四番目又ハ略三番略服儀)

役別	装束	附
シテ里女	面曲見入、深井、髪、髪帯、着付泊、腰巻綾箔、腰帯	白水衣(白練坪折ミ)、扇、笠(雷ツク)
撥シテ葛城明神	面前同、髪、髪帯、黒垂、天冠(葛蔓ツク)	着付泊、色大口、舞衣(長絹ミ)、腰帯、扇
ワキ羽黒山の伏	兜巾、縁懸、着付小格子、白大口、水衣、腰帯	小刀、数珠、扇
ワキツレ山伏二人	ワキ同装	

作物 杖 員装 雷ツクル

葛城

^{羽黒山}神の昔は跡とあてかたはた
^{ワ上}山伏二人
 羽黒山よりあてはる山伏ふくはる
 宿禰の子細みにより。只今葛城
 の明神よ来詣はりゆキヤ^{羽黒山}上^{ワ上}は縁懸の

羽黒山

羽黒山

神の於て起すの^キ岩根の
枕松陰のやどりもきげき出ぬ^ツ續く
山又山を越^トて^キ引^キて^キ後^キあり
大和路や葛城山ふた^キり^キり^キ
^コ急^キに^キ後^キよ^キは^キら^キふ^キ葛^キ城^キ山^キよ^キは^キら^キふ^キ
あら笑止や。俄に雪の降りて来りて

ゆいふ。是あは岩陰よ^キ立^キか^キあ^キを^キ
晴さむやと思ひ^キに^キを^キよ^キて^キい^キ

^{して女}な^キし^キく^キ山^キ伏^キ建^キの^キ方^キは^キあり^キ

^{呼カケ}ゆ^キぞ^キ ^コ是^キ ^コ葛^キ城^キの^キ明^キ神^キ ^キある^キ
者^キふ^キく^キゆ^キら^キ唯^キ今^キの^キ雪^キに^キ休^キら^キひ^キゆ。
依^キて^キ身^キは^キい^キち^キある^キ人^キぞ ^キ是^キ ^キい^キけ

目上
 ぶきを体あおつゝあせ
 ち世やさんとうぐの山のとかげより
 さらでも候し宛そを伴ひを
 道きさるる山人の
 目上
 呉山のきき香づー楚地の苑
 小謡
 肩上げはさふ
 無類の月を

かまふけ控路のほまよふ香の苑を
 ま折つかつる女や山人のまきも
 廿物も埋もれてききそくたれ谷の
 石をたどりくゆり来ては木の庵の
 志じらるる
 目上
 心ほり
 心ほり

是より標のゆをたまたましては條敷を。
不^{シモト}させまらせぬん ^{コ見} 何ら面白^モ也
標とこのおれ者ふくゆり ^{して} 事
新^ラ装^セ作^セるか。け葛城山の昔は内よ。
結^{アツ}ひ集^{アツ}めしるおごの物とまもると
志^ハ海^ハ一^ハ足^ハれぬい^ハ情^ハをた^ハか^ハるか

^{コ見} あら^ハ怪^ハう^ハし^ハや^ハ信^ハけ^ハ標^ハとい^ハか^ハ本^ハの
葛^エ城^{シヨ}山^ヨは^ヨ由^エ緒^{シヨ}あ^ル本^マて^ハゆ^スあ^ハふ
カ^スよ^ヤ及^ブ古^キ規^キお^ニも^モ標^ヒを^ヒま^スる
着^カな^ラせ^カが^ハけ^ラた^ハ山^ノ者^ハふ^カあ^タり。
是^ヤ大^マ和^ビ音^ビの^カあ^ハい^マ ^{コ見} ^上 実^ニ
古^キ規^キ大^マ和^ビ音^ビは^ハ奇^キの^カ昔^キを^ヒあ^ハい^マの^カ

お柄杓も 燐のたもと さまさま
ゆかりの山ぶねのまじり
るなく時なく ねもあつらふ
詠む方の言は 糸流て大和の
神のまもる世の余起は乃
見し白雲や 雲のたもと さま

夕煙り松の枝をく 焼くまよ
着城や本はる光る稲妻の山伏
のまつ火くところを見れ 実や世の中
電光石火の火は光のるごと
思ひたる 我身の歎きまよ
おのひまは 葉を焼くまよ 捨人の

菅の衣は又深く 法は心の深
乃袖もさあざら白妙のきにかえを
そふかぐだの條也とほちの標成
葉めは木と焼もを月とふせぐ
葛城の山伏の名ふおろぬ神の
松とて牙を休め強入や心身を休め

強入や 心を
勤めを始末さうぶるよそい 勤
と、有難や。我は悩める心地あり。
勤めの心序ふ祈り加持してたびあ
そも祈りが持ていふ何とやらある
東にさゆぞ 心あふむ女ハ

Shenon

み障の罪おもたよ。法の処の呪咀
を更て。此の者ふおま。葛がら
に身と戒めて。然二替の苦し
あり。上。身を助けたを。よせ
ふ。たあ。い。よ。も。も。神ならで。
三替の苦し。み。と。い。よ。事。有。ま。ら。

私う。ち。う。ら。葛城の神の若橋
尋。た。う。い。よ。お。め。と。明。王。の。索。ハ
から。身。を。結。めて。今。お。苦。し。と。終。ぬ
身。なり。上。扱。ハ。不。思。儀。や。葛。城。の
神。の。苦。し。と。終。ぬ。石。川。の
神。身。と。して。苦。し。の。か。る。

三替

巖の 極川をきづらるる
匍ひ鷹ごりて 露ふたれ
おろまらるれ 記非のまほも重
岩の内 あくろびき
葛城の神よ 妻の苦しみあり
祈り加持して たびたびと 岩橋の

末縁へ 神隠れよ ぞなりのき
神添へて 法の慈れとこと
法味をたぎて 終夜 かの葛城の
神意夜の 祈ひ声 一心 敬礼
わき葛城の 祈も 祈の法よ

出端上

夜更の岩をたはぞ入り給ふ岩の
内もぞ入りたまふ

卷

絹

梗概

(所) 紀伊國熊野

(季) 十二月

時の帝、靈夢を蒙り給ひ、國々より千足の巻絹を三熊野に納めしめ給ひし時、都より巻絹を献する男、途中音無の天神にて梅の咲けるを眺め歌をよみて捧げなどせし為め遅参せり、よつて三熊野の神職其罪により都の男を縛したりしが、此時音無の天神巫女に乗り移り、都の男は敬神の心厚ければ免すべし其眞實を見せんとて其男に手向の歌の上の句を詠せしめ、神自ら下の句をつけて神慮の偽りなきを示し給ひければ、神職は直に彼の男の縛をゆるしけり、かくて巫女は和歌の徳をたへ祝詞をそなへ神樂を奏してありしが、再び神靈のり移りて狂はくならず、熊野金山悉く佛法守護の神となるべしとて舞ひ狂ひ、かくして神は日昇天し給ふと見ゆる程に巫女は本性に立ち歸りけりとぞ。

卷絹 (四番目又ハ 略三番略服能)

ワ キ 敷 使	シ テ ゾ レ 男	役 別	
		シ テ 坐 女	装 束 附
腰帶 扇	扇 着竹無地髪十目 白大口 纏水衣 腰帶	木綿襦 扇 幣習アリ	面 十寸神又ハ増 鬘スベラシ 着竹竹箔 緋大口 白水木 腰帶

巻絹

^長 柞是ハ當今^{タウキ}に仕^キなる^下也。
 扱^ガル我君あら^クなる^電を
 象^シひ^子足^ノの巻絹と^ニ態^申ふ
 納め^サせ^トの宣旨と^ス象^ハひ^テ巻絹を
 集め^ルに^テ同部より^テ集^ムる^也

巻絹

巻絹

巻緒いよしあらば福よあつて

いづ神前よ納めやたやとなり

^{つぎ男} ^{ヨ上} ^{不才} 今も始めてと終りあつて

踏よつたやうん 都のみがら

なるとも藤ハの安らるるが

是は殊更王土の命をきかぬ

南の玉中ぐふき地子屋の演も

山は昔流れ嶽しきをい川の教ん

旅の及休らふるもなれたむか

是とも君の仁慈ふよる濃し

然もよひ紀の園越へておごと

く又ふを其あはれ

たる由^レに^レ中^レに^レカ^レく^レ巻^レ縮^レを^レ持^テ
ありて^レ何^トして^レ進^レあ^レつ^レい^レら^レぞ。
其^レ為^ルふ^レこ^レそ^レ目^レ救^レを^レ定^メめ^ル中^レ守^ルふ。
汝^レ人^レ惡^クあ^ルる^レ其^レの^レ身^レの^レ料^ハ
遠^レれ^レど^レ一^レ切^レて^レ禁^レめ^ルあ^ラら^レず。
き^レち^レ苦^クし^クみ^レを^レと^レり^レて^レ海^レの^レつ^レら^レり。

罪^ノの^レ報^レい^レを^レ知^ラせ^レタ^レリ^ニ
あ^シく^レ其^レ志^スも^レ人^レを^レば^レ何^レし^レ禁^メめ^ル
給^フぞ^レと^レ者^レは^レま^レの^レみ^レ音^ノ母^ノの^レ天^ノ神^ト
にて^レ一^レ首^ノの^レみ^レを^レ詠^フ我^レは^レあ^レん^ニ
者^レな^レれ^バ納^メ受^メ何^レま^レば^レ神^トを^レ思^フあ^シく^レ
涼^シく^レ三^レ懸^ノの^レ苦^クし^クみ^レを^レや^レめ^ルら^レる

三懸

夫の^中人倫^ハひな^ハし^コ其繩解と
 我^スと^テけ^ハや^ト櫛^ノの^ハ乱^シ生^ケ友^ニ
 日^上や^ト櫛^ノの^ハ乱^レ髪^ノの^ハ神^ハ交^ハま^ハや
 清^ク注^シ連^レれ^ハ繩^ノの^ハ引^立て^テ解^クん^トけ
 何^トと^シ結^ビひ^テ情^ナや^カ是^ハ何^ト
 何^トと^シ結^ビひ^テ情^ナや^カ是^ハ何^ト

此^ノ日^トも^モ其^ノの^ハ天^ノ神^トよ^テ一^ノ首^トれ^テあ^をを
 詠^ム我^トよ^マま^ト向^フ者^ナま^きバ^ハ疾^ク
 繩^トを^シぬ^ク其^ハ思^ヒも^カあ^らぬ
 車^トを^承り^ハ物^カか^ハ櫛^トは^枝友^者
 の^ハあ^など^ハ詠^ムむ^キ車^トを^承り^ハ物^カか^ハ櫛^トは^枝友^者

神代卷

あつゝ、^{ウタガ}かみかほにも、^{ウタガ}新なるあはれ我がこゝ
れも^{イツナ}神意を偽りしや。かゝらだ
彼者まの、我まの、^{ウタガ}同しそのあはれ。
まよのちをかれし、^{ウタガ}同し、^{ウタガ}あはれまよ
下をば、^{ウタガ}はく、^{ウタガ}けよ、^{ウタガ}え角、^{ウタガ}かふ
及ぶ、^{ウタガ}いふ、^{ウタガ}汝、^{ウタガ}誠、^{ウタガ}教、^{ウタガ}を、^{ウタガ}詠、^{ウタガ}い、^{ウタガ}ま。

まよの、^{ウタガ}句、^{ウタガ}を、^{ウタガ}か、^{ウタガ}へ、^{ウタガ}今、^{ウタガ}の、^{ウタガ}悼、^{ウタガ}り、^{ウタガ}か、^{ウタガ}ふ
及ぶ、^{ウタガ}だ、^{ウタガ}か、^{ウタガ}の、^{ウタガ}音、^{ウタガ}を、^{ウタガ}の、^{ウタガ}心、^{ウタガ}は、^{ウタガ}い、^{ウタガ}の、^{ウタガ}あ、^{ウタガ}は、^{ウタガ}れ、^{ウタガ}ま、^{ウタガ}よ、^{ウタガ}。
ま、^{ウタガ}梅、^{ウタガ}の、^{ウタガ}色、^{ウタガ}異、^{ウタガ}な、^{ウタガ}り、^{ウタガ}し、^{ウタガ}を、^{ウタガ}何、^{ウタガ}と、^{ウタガ}な、^{ウタガ}く。
ま、^{ウタガ}も、^{ウタガ}深、^{ウタガ}ま、^{ウタガ}て、^{ウタガ}新、^{ウタガ}を、^{ウタガ}ら、^{ウタガ}り、^{ウタガ}ま、^{ウタガ}る、^{ウタガ}た、^{ウタガ}の、^{ウタガ}に、^{ウタガ}。
ま、^{ウタガ}か、^{ウタガ}つ、^{ウタガ}咲、^{ウタガ}き、^{ウタガ}初、^{ウタガ}む、^{ウタガ}る、^{ウタガ}梅、^{ウタガ}の、^{ウタガ}ま、^{ウタガ}あ、^{ウタガ}は、^{ウタガ}れ、^{ウタガ}ま、^{ウタガ}よ、^{ウタガ}。
ま、^{ウタガ}さ、^{ウタガ}ら、^{ウタガ}せ、^{ウタガ}ば、^{ウタガ}後、^{ウタガ}の、^{ウタガ}知、^{ウタガ}れ、^{ウタガ}ま、^{ウタガ}い、^{ウタガ}と、^{ウタガ}詠、^{ウタガ}い、^{ウタガ}ま、^{ウタガ}よ、^{ウタガ}。

寂・意・閑・定・の・床・の・上・は・は・花・あり
色・も・眼・を・去・る
本・有・の・靈・光・忽・ち・照・し・自・性・は・月
漸・く・雲・法・も・れ・り・一・首・を・詠・む・れ・ば
よ・ろ・の・の・思・を・と・き・ま・り・天・を
得・ま・ば・法・く・地・域・は・ま・を・ら・女・

何・ら・ら・の・唯・有・一・愛・お・唯・一・金・別
と・六・説・を・や

日
婆・羅・門・僧・正・の・基・菩・薩・の・清・い
を・多・り・靈・山・の・秋・加・の・清・け・は・契・り・て
空・如・朽・せ・る・道・ひ・と・つ・と・詠・が・の・れ・ば
以・て・方・に・伽・昆・羅・海・は・契・り・し・事

兼・持・り

一

のかし有りて文珠の清教を尋む
なりと互ひに佛不^ニけを^シ尋ずも
和奇の徳よつらびや又神のあま
八重垣うこそ^ニの^ニま^ニの^ニ例
い^ニま^ニを^シ傳^フて^シ神^ノ住^ル連
ゆ^ニま^ニの^ニ風^ノ乃^トと^シけ^ニを^シ思^フる

コ長

さつらば^ツ花^ハ何^トと^シあ^ラせ^ラれ^ル神^ヲを

涼^ク免^ヤせ^レぬ^ル心^ヲ得^テて^ル

ツ上
おツ
金出
春流
者アリ

謹^ニ上^ニ再^ニ尋^フ 柞^ノ當^ル山^ノ法^ノ生^ルの

た^ニけ^ニと^シ今^ノ別^ノ山^ノの^ニ靈^ノ光^ノを^シ地^ノよ^シ死^ニで

靈^ノ地^トな^リ今^ノ大^ノ卒^ノを^シな^リ

旧上

され^バ清^ク獄^ハ今^ノ別^ノ界^ノの^ニ曼^ノ荼^ノを^シ生^ラ

askim...

...

華藏世界。慈母よ。胎藏界。

密嚴淨土。有難や。五時神楽。ヨル。あ。

ぎや。祝詞の巫物。粗し。の。

さ。も。何ら。さ。なる。あ。お。い。て。

神が。さ。り。する。そ。恐。く。な。れ。

下。彼。及。阿。弥。陀。如。來。十。惡。を。

導。起。又。送。を。機。む。中。の。お。前。が。

甘。味。師。如。來。藥。と。成。く。二。世。を。

助。く。一。万。文。珠。三。世。の。完。母。さ。り。

十。萬。音。貫。漫。山。護。法。

救。の。神。か。の。神。巫。ふ。法。く。も。か。み。

の。幣。も。私。き。て。空。よ。飛。ぶ。ま。の。

日

日

翔りくくして地よ又踊り珠救を
揉み袖を振り高足下足の舞の
よをそそそ是迄なれや神はよそを
給ふといひ捨る声の内より狂ひ
そめて又本性よそ成よそなる

三 輪

梗概 (所) 大和國三輪

(季) 九月

和州三輪の山陰に住む玄賓僧都の庵室へ、毎日櫛開如の水を汲みて訪わ来る女
今日も亦訪ね来れるより庵室に請じ入れて語らふ中に、女言ふやう、秋も夜寒にな
りたれば衣を一重賜れかしと。僧これを與ふれば女いたく喜びて立ち出づるに、僧そ
の住み家を尋ぬるに、三輪の里にて山本近き處杉立てる門を、しるべに訪ね給へと
言ひ残して去り行きけり、或日僧三輪の里に女を尋ね行き見れば、二本の杉の立てる門
あり、其上に曾て女に與へし衣のかけれるより不審に思ふ折柄、杉の木蔭より三輪
の明神女体にて現はれ給ひ、三輪の名の由末、天の岩戸の初まりなど語り、神樂を奏し
かゝて夜の明くると共に僧の夢は破れ失せしとなり。

三輪 (四番目及七番目略服)

役別 装束 附

ワ キ セ 僧 形	後 シ ア 三 輪 の 神	シ ア 里 女	面、曲見 髪 髪帯 着付箔 唐織着流 敷珠
角帽子 着付無地扇十目 水衣 腰帯 敷珠 肩 水衣 舞台シテ シテ、濃ス	緋大口 腰帯 長絹 扇	面増 髪 髪帯 金風折烏帽子 着付箔	

作物 杉(流連張止) 木の葉 簪

三輪

是ハ和列三輪の山陰に住居する
 玄賓僧がよまていふ爰ふ何れとも
 知らぬ女性。毎日檣於伽の水を
 持て来りいふ今日も来りていふ。
 いらなる者ぞ柄を尋ばやと思ひい

して女
ヨ上

云輪の山と道もな

捨京の美と尋ねん

を少不定とて世の中らに身ハ

残りいく春秋をう送りもん

浅るや成を事なくて徒らふ

曼年月と二編の墨は信居まる

世にて待らふ又この山修し去賓

僧がとそ中まき人の心入る程ふ

い川も揺る伽の水を持て来りて

くもも又来らむをやと思ひたいうふ

け内へ案内中たれ 上 山頭よ夜る

孤編の月を裁き 洞口よ朝一所の

二書

カ

雲を吐く^{スデル}山田^{カト}もあるそほづの身も
 悲^{カナ}しけれ秋果ぬまきばふ人なほ
 いらちへ案内^{コノ}ヤル案内^{コノ}ヤルさん
 といに河も橋^シが伽の水を持て
 来^上まらる人^上り山^上新^上川^上はい川^上で
 推^{オセ}どもあま^{コノ}月光^{コノ}地^{コノ}ふあ^{コノ}と

拂^ハども又^ハ生^ハん^ハ鳥^ハ声^ハとあ^ハ
 か^ハま^ハして^ハを^ハ生^ハと^ハ静^ハなる^ハ山^ハ居^ハ
 采^ハの^ハ編^ハぐ^ハを^ハ押^ハ開^ハき^ハ郵^ハも^ハ尋^ハね
 き^ハり^ハ桜^ハ罷^ハを^ハ助^ハけて^ハた^ハび^ハ強^ハく^ハ
 秋^ハを^ハ窓^ハの内^ハに^ハ新^ハの^ハ松^ハ風^ハ
 お^ハ志^ハづ^ハれ^ハ木^ハの^ハ葉^ハを^ハ振^ハぬ^ハく^ハ庭^ハの^ハ面^ハ

ハナ

カキ

門カドのササ律リツやヤ閉トはハらんン下シタ樋ツのノ氷ヒも
苔コケふフ雪ユキふフ静シヅかなナらラこノのノ山ヤマはハ何ナニぞ
寂サビしシきキいイらラにニ宿ヤクぢヂよヨかカべベきキ事コト
のノ何ナニぞコトふフてテゆユぞコト 妾メカよコト
衣イとト一イチきキ場バつツりリ久ク 何ナニとト
衣イのノ不フ量リヤウとトらラやヤ 妾メカまマいイのノ事コト

けケ衣イをヲ来キらラせセゆユ 何ナニとト 何ナニとト 何ナニとト
とトらラばバいイ喉ノドかカたタゆユをヲんン 暫シヅ
けケ程チヨウ櫛シ於オ伽カのノ氷ヒをヲ持チてテ来キりリはハなナ
いイ志シとトひヒくクもモ有ユ難ナンうウゆユとトくク
心ココロ身ミハハ何ナニとトはハ何ナニとト人ヒトぞゾ任ニ家カをヲ
いイあアりリゆユいイ 妾メカがガ任ニ家カハハ三サン痛ツクのノ里リ

山本近江ありと云ふと我屋の
三輪の山本さうくふと云ふ
たれを何と我も尋ねぬ
去りては我も不審よと云ふ
訪らひ来ませ 杉立の
にて尋ね給へといひ捨てかき消

如くは失ふと云ふ 作物 中入 け草菴を
立かて 杉立の 三輪の
近江の山本さうくふと云ふ
なりきと云ふ 杉村を
神垣の知あるらん
ぬきと云ふ 杉の下枝を

見れば有はる女人よと入つる夜の
見たりたるそやあがりて見れば衣の
縷子今主笑の文字さといまより縷子
見れば歌也その痛の清くまよ見
そを衣くると思ふあかえと思つて
上子振神も解ひのつる由ある

人の徒遇ふまよふぞ嬌しき
是^上ある杉の一本より妙なる清声
あはれは泣きもどや同じく末世の
病生のもまひを照らす姿を
まよふまよふと心解深き感涙よ
夢の衣を濡れまどや

ながら我婆上人は海へ下り罪を
助けてたびたびいふ罪科人
にあり。そのいふある神道の
流生淋度の方使なるを 将
一連ひ乃 人公也 女婆と
三痛れ神 釋掛帯ひき

かへきたる。靴子が悪くまきたる
烏帽子将衣裳裾れ上よりけ
海新河らたふる之流ふ流きをか
の事や それ神代の昔物語ハ
末代の流生れ為淋度方使の流
果て以て世のなるなり 中も

△ク
下セ
任舞

七夜の夜は人教の神力中
大湊の夜は同里志づること
足曳の大和の國は年久し
一又 夫婦の者ありハ子代を
玉椿を交らぬ交を頼むけ
されだけ人夜は来れを
任舞

或夜の睦ふり身い成故より
卯年月を送る所の昼を何と
鳥羽玉の夜ならで色ひ給をぬ
いと不審多き事なり 只同
とこしなよ契りも籠へと有じ
かむらひの人登りいし振もふも女ハ

下セ

下セ

飛うのもりて余怨ま知らまき
なん今より後をよすやう契りも
今宵斗りなりと窓子語まき
さびが別まの悲しきふ海を知ら
あらんとて小田巻は針をほけ
裳を裾はきとぞ付て路を扱へ

て慕ひかく上りて青柳の系
長く結ぶや速むたおのが力
しがふの系線う下ゆ程まこの
山本は神垣や杉の下枝に留たり
おどろも浅きや契りし人の
姿り生るふのこよげ残りしより

三痛の志はしのみだりよも徳を
付けて悦びやあの上をロレギむふ有難き
物語やま付てゝる法の道程も
頼むむらかしてさらば神代の
物語委しくいざや歌をさか
上人を慰めん白上 先ハ岩戸乃

其始め湯まきし神を出さんとして
八百系の神抱びこそぞ神樂の
もぐめなるコイム 中かふ子振神乐
天の岩戸をツエもたてて 神を
詠なく入給へトゴ常世の夜と
早かりぬノラ八百系は神をタチ

岩戸の前にて是を歎きニル神乐
を奏して舞給へ日天照右神
其時よ岩戸を少イ筈ま給へを
又岩戸の雲晴て日月光りかや
け人の面去るごとくある
面白やと神の清声の日妙なる

始めの物が大コオク思へば伊勢と
三痛の神日一神分身の
御事今又何と岩倉名や持の
関の元はあもゆひかく有難死
夏の昔サマ岩倉や名残なるらん

神楽

十一卷

龍田の明神に参詣せんとて龍田川を渡らん
 とすやと云へば龍田川紅葉ばとする薄氷の一首を引きて猶も戒めたる後自ら先立
 ちて聖を社前に導き、神木など懇ろに教へてありしが我こそ龍田の神よとて社壇の内
 に入りけり、聖神徳のあらたなるに感じ、夜もすがら神前に禮拜すれば、深更に至
 り神體を現し給ひ、明神の起りなど説き、紅葉の謂など物語り、神樂を奏し、か
 くて夜の明くるに及び天上に去り給ひぬと。

龍田

梗概 (所) 大和國龍田

(季) 十一月

六十餘州に御經を弘むる聖、龍田の明神に参詣せんとて龍田川を渡らん
 とすやと云へば、龍田川紅葉ばとする薄氷の一首を引きて猶も戒めたる後、自ら先立
 ちて聖を社前に導き、神木など懇ろに教へてありしが我こそ龍田の神よとて社壇の内
 に入りけり、聖神徳のあらたなるに感じ、夜もすがら神前に禮拜すれば、深更に至
 り神體を現し給ひ、明神の起りなど説き、紅葉の謂など物語り、神樂を奏し、か
 くて夜の明くるに及び天上に去り給ひぬと。

龍田 (四番目又ハ
略三番略稱能)

ワキツレ 從僧二人	ワ キ 殊 僧	後 シ テ 龍 田 姫	シ テ 巫 女	役 別
ワキ同装	角帽子 着付小格子、白大口 水衣 腰帶 數珠 扇	腰帶 長絹(舞衣ニモ) 扇	扇 面、増 髪 髪帶 着付箔 唐織着流	装束附

作物 宮(引廻シカケ) 聲

龍田

^{舞臺}
^三
^六
^ノ
^上
^ヲ
^身
 教の乃も秋津玉。救はる
 法を納めん。是は六十余列
 此経戒をさむる聖にさゆられ
 此程、南都よゆひて、雲佛入天社
 歸りてふ。又是より龍田戒よ

河内の玉と多岐川多岐川上上古記名
宗良の歌をよみて有明
跡をみるの面は大寺を余起よ
えてかたまやききるか秋は條や
卯山の紅葉ふ残る龍田の川よ
着ふたりか急急な程ふ

龍田川よ急急てゆけ川を渡り龍田の
明神よあたらたまやと思ひか

よて女なや呼カケその川を渡りほひそ
コカふ思後やおけ川な渡りそとまハシいる
方かをかんれた向ひよ女かのゆがかヤカハ
暫か休らひ給かやかた車かのゆか是かハ

六十余列子^{ラサマ}の^{ヒビ}経を納る^{ヒビ}重に^{ヒビ}く^{ヒビ}ぬら。
け川を渡り^{ヒビ}龍田の^{ヒビ}神へ^{ヒビ}来ると
思ひ^{ヒビ}ぬ^{ヒビ}知^{ヒビ}と^{ヒビ}何^{ヒビ}と^{ヒビ}て^{ヒビ}け^{ヒビ}川^{ヒビ}な^{ヒビ}渡^{ヒビ}り^{ヒビ}そ
と^{ヒビ}承^{ヒビ}り^{ヒビ}ぬ^{ヒビ}ぞ^{ヒビ} ^{ヒビ}され^{ヒビ}ば^{ヒビ}我^{ヒビ}神^{ヒビ}よ
来^{ヒビ}り^{ヒビ}給^{ヒビ}ふ^{ヒビ}も^{ヒビ}神^{ヒビ}意^{ヒビ}よ^{ヒビ}来^{ヒビ}り^{ヒビ}ん^{ヒビ}為^{ヒビ}也。
心^{ヒビ}も^{ヒビ}な^{ヒビ}く^{ヒビ}て^{ヒビ}け^{ヒビ}川^{ヒビ}を^{ヒビ}渡^{ヒビ}り^{ヒビ}給^{ヒビ}た^{ヒビ}ま^{ヒビ}。

神意も^{ヒビ}い^{ヒビ}ふ^{ヒビ}有^{ヒビ}り^{ヒビ}ぬ^{ヒビ}づ^{ヒビ}ま^{ヒビ}し^{ヒビ}と^{ヒビ}思^{ヒビ}へ^{ヒビ}ど
か^{ヒビ}極^{ヒビ}よ^{ヒビ}か^{ヒビ}な^{ヒビ}り^{ヒビ}是^{ヒビ}ハ^{ヒビ}名^{ヒビ}ふ^{ヒビ}お^{ヒビ}よ^{ヒビ}龍^{ヒビ}田^{ヒビ}
川^{ヒビ}心^{ヒビ}も^{ヒビ}な^{ヒビ}く^{ヒビ}て^{ヒビ}渡^{ヒビ}り^{ヒビ}給^{ヒビ}ら^{ヒビ}神^{ヒビ}と^{ヒビ}人^{ヒビ}と^{ヒビ}の
中^{ヒビ}や^{ヒビ}終^{ヒビ}か^{ヒビ}ん^{ヒビ}能^{ヒビ}く^{ヒビ}業^{ヒビ}づ^{ヒビ}て^{ヒビ}渡^{ヒビ}り^{ヒビ}ぬ^{ヒビ}
實^{ヒビ}今^{ヒビ}う^{ヒビ}思^{ヒビ}ひ^{ヒビ}都^{ヒビ}た^{ヒビ}り^{ヒビ}龍^{ヒビ}田^{ヒビ}川^{ヒビ}紅^{ヒビ}葉^{ヒビ}
私^{ヒビ}ま^{ヒビ}り^{ヒビ}て^{ヒビ}流^{ヒビ}る^{ヒビ}め^{ヒビ}る^{ヒビ}里^{ヒビ}渡^{ヒビ}ら^{ヒビ}ば^{ヒビ}孫^{ヒビ}中^{ヒビ}や

後かんとあ。古家ののかやあんとあ
中うの事この歌ハ。紅葉の氷は
あふまいて。氷を張きる如くあれば。
渡らば橋中や後あんとなる。去作。
程の深きかあ。紅葉とやハ。當社
の神神。神は恐きも有ればと。

禁め給ふ心イタシもあり。実コトはま
さる事なれば。ともや紅葉の頃も
時トキは川カハの面オモも薄氷にして。立波
出イるもぬなり。許イせ給へ。渡りて
新ニらん。や。程もハ。料トガあり。
渡らば中ハ。後ん事。紅葉の橋ハ

限るべからむ。氷きき時、^上も龍田川。
 渡らば氷の中終んとの^上生^イ戒^イめも
 ある物を^{コト} 婦^メも^イ紅^{ベニ}糸^{イト}の^イ珠^{ジュ}
 ならで氷よも又中終んとの^イ謂^イハ
 いる事や^{コト} 後^{ノチ} 紅^{ベニ}糸^{イト}の^イ歌^{ウタ}を
^{ミカド}帝^{ミカド}の^イ法^{ホウ}制^{セイ}也^{ナリ}。又^イは^イ後^{ノチ}の^イ家^イ家^イ隆^{リウ}の^イ事^{コト}也^{ナリ}。

日上 小滋

龍田川紅糸を^イ聞^イる^イ所^イ氷^イ渡^イら^イば^イも
 中^{ナカ}や^イ終^イな^イん^イと^イか^イ極^イよ^イま^イ秘^イて^イ詠^イむ
 た^イれ^イが^イあ^イる^イべ^イ紅^{ベニ}糸^{イト}よ^イ限^イる^イべ^イから^イむ
 氷^イにも^イ中^{ナカ}終^イ由^イる^イ名^イの^イ龍^{リウ}田^{テン}川^{カハ} ^イ ^イ
 珠^{ジュ}織^{オリ}く^イ神^{カミ}を^イ月^{ツキ}の^イ冬^{フユ}川^{カハ}よ^イ成^イと^イも
 紅^{ベニ}糸^{イト}を^イ聞^イづ^イる^イ所^イ氷^イを^イ情^イあ^イね

申^マ終^マて^テ渡^ワらん^ル人^ニ心^ヲな^シや^スま^シま^シ
 だ^ニよ^ク危^キき^ニ薄^ク氷^ヲを^踏ま^りの^心
 壁^も今^も不^知ら^ずま^りたり[〜]
 妾^ノ神^巫に^ての^程よ^の神^ノの^心道^ヲ
 志^スる^者は^一は^ずと^いふ^人な^らず[〜]
 是^レを^龍田^の神^とい^ふ〜[〜]

扱^ハ是^レを^あら^う龍^田の^神を^て
 心^ヲ望^ムひ^けら^うを^南日^や頃^ハ
 我^レ等^月あ^れば^本の^指も^を括^て
 字^々矣^淋〜[〜]社^政の^清垣^ヲ盛^り
 なる^にあ^らず[〜]お^もい^はす[〜]是^レハ^神を^求
 にて[〜]は^んが^當國^ニ痛^クの^心

結んとして神を呼ぶ外ふくりに
 神出カケ遊上れとて更出カケに氷上清くや
 龍田の川は頻りに鳴動して
 直線が報も声に有明の月
 灯火の光り上は上上る和光因茲おのり
 光りも朱の玉垣がやまてあふふ

神神頭オコのまきたり上我神オコ付上より
 このかこげ秋は洲地を志をきく
 君を守りの清神をち後一清代の
 光りも天照るやもみちのまも八葉
 の葉さとりち神のまをあらう
 やひたの駿傳の法味よりまきて

秋半ふ宝燈のりらなり
クハ上 栢
 流系のち神と別ち尚社の事
 なり者天祖の詔末のりらなる
 清國とや本 社ミコトナリ 結まを當國
 宝山よいら日 天地治まを清代アツチ の
 意も民安んふ豊なるもをんよ

△クセ
 下
 任舞

尚社のち故あり中 栢の秋は四方の
 いろ日 子秋の清氣目新たりキヤ
 幸毎よ知義ふを流る龍田川港や
 秋のと海なる山も動ぎ海早
 波静ふて樂とのみれ秋の文名
 栢立田の山月も静う成りまキヤ

中
 能き^ニ代^トの歌人^ノも心を^ト深めて
 毛み^ニぢ^ニ糸^ノの^ニ神田^トは^ト山^ノの^ト新^ト藤^ト春^ト貝^ト
 紅^ト糸^トに^トあ^トら^ト糸^トも^ト只^ト紅^ト色^トは^トめ^トぐ
 終^トへ^ト今^ト朝^トより^トの^ト神田^トの^ト機^ト多^トぞ^ト濃^ト
 夕^ト日^トや^ト花^トの^ト志^トぐ^トれ^トあ^トら^トんと
 詠^トし^トも^ト紅^ト井^トは^ト心^トを^ト深^トし^ト詠^トあり^ト

上
 神^ト南^ト伎^トの^ト清^ト室^トは^ト春^トや^ト秋^トら^トん
 日
 神田^トの^ト川^トは^ト氷^トの^ト濁^トる^トを^ト和^ト光^トの^ト影^トに
 明^トら^トを^ト見^トま^ト如^トの^ト月^トは^トな^トほ^ト照^トる^ト也^ト
 神田^ト川^トも^トみ^トぢ^ト私^トき^トし^ト路^トを^トき^ト屋^ト
 古^トの^ト海^トの^ト今^トの^ト氷^トの^ト下^ト紅^ト糸^トあ^トら
 美^トや^ト美^トの^トあ^トら^トち^トを^ト紅^トの^ト影^ト氷^ト

渡らばおきも氷もまわて申たあ
 屋もやいそ今渡らん 去程ふ
 救神樂の 時梅りは去て
 宣稱が轂も救ふりこ月もおきも
 白和幣振りよき声をもむや 太コ合
 謹上 再臨 久望の月もあ
 任事 中 日 上 太コ合
 神 上 太コ合

来る流系り 波の立田乃
 神の清きよ 波の立田乃
 別ち神のぬき 龍田の山月の
 時海増ちき六 現の鈴の声
 立や川波ハ それ我白は綿
 神月松系吹私きく 紅きふた
 日 上 日 上 日 上

328

298

潛作權所
復製不許

昭和
改本
撤版

昭和五年四月五日印刷
昭和五年四月十日發行

訂正者

廿三世 金剛右

金剛右

發行所

檜常之助

東京市神田區錦町一丁目拾番地
合資會社 檜書

檜書店

京都出張所

祝言

發りてはよむにばけのの清きも
ぬきも翻る小志衣漢と再臨
再臨く山河草木國全
流よりて神は上らむを給ひる

終

